

1 □ この時代に求められる「教会」の形成 5

聖書と教会

－福音主義教会論：再考－

2010年5月31日10:30-2:30

近畿放送伝道協会事務所

関西聖書塾主催セミナー

一宮基督教研究所

安黒務

2 □ 講演における狙い

宇田進著『総説現代福音主義神学』

- 十六世紀の宗教改革に根差す歴史的な福音主義キリスト教の視点を尊重する立場から
 1. 鳥瞰図：「教会論」に関する今日の神学的状況と動向に関する分析と情報の提供
 2. 争点：「教会論」に関する注目すべき問題点と主要な争点の指摘
 3. 福音主義教会論：福音主義を標榜する諸教会の“核”を成す「福音主義教会論」の確認とそれに関するより一層の掘り下げへの一つの呼びかけと、そのための材料

3 □ 見落とすことのできない諸現象

宇田進著『総説現代福音主義神学』

1. 極端な象徴主義の問題：キリスト教の教理信仰告白（信条）の“シンボル化”（象徴化）と、それらの“非神話化論的解釈”の広がり状況、また教理的立場の問題において“ボーダーレス現象”（神学上の歴史的・伝統的な“線引き”を棚上げする傾向）が台頭
2. 極端な字義主義の問題：二十世紀中葉以降に世界的に復興を証してきた「エバンジェリカル」（福音派：“歴史的キリスト教”を重んじる改革派から聖霊派にまたがる）を一面的かつ一面的に定義もしくは概念化した「ファンダメンタリズム」（根本主義）と同一視しながら、教会と神学について語る傾向

4 □ アップ・トゥ・デイトな『福音主義教会論：再考』の資料源

宇田進著『総説現代福音主義神学』

- ヘンリー・シーセン著『組織神学』に代わるアップ・トゥ・デイトの組織神学書の必要性
 - ミラード・エリクソン著『キリスト教神学』の翻訳・監修と
 - その序説としての宇田進著『総説現代福音主義神学』
- 「福音主義神学：再考」の中の、“教会論”版としてアップ・トゥ・デイトな『福音主義教会論：再考』をするために
 - 宇田進著『総説現代福音主義神学』の「教会の理解と誤解」
 - エリクソン著『キリスト教神学』の「教会論」

5 □ 午前・午後の講演概要

- 午前：教会論についての鳥瞰図と争点
 - 主として、宇田進著『総説現代福音主義神学』の「教会の理解と誤解」より+文献紹介
- 午後：「組織神学」における争点と福音主義教会論
 - 主として、エリクソン著『キリスト教神学』の「教会論」より+文献紹介

6 □ 1. 神の民としての教会

宇田進論稿「教会論」新聖書辞典

1. 「教会」の歴史的・漸進的・有機的理解
 1. 「神の民」という概念は、イスラエルの歴史と新約の教会を貫く神の救済の文脈から教会をとらえていることを示している
 2. 旧約においてあらかじめ準備されていた神の民としての教会が、救い主の到来において歴史の中にその究極的な形態を見出したのである
2. 従って、教会は「受肉から再臨までの、いわば挿入」であるとする解釈は不適切である
 - 古典的・修正主義ディスペンセーションの「教会」理解の否定

7 □ 2. 霊性と秩序としての教会

H.G.パールマン著『現代教義学総説』

1. 新約聖書の教会の中でペンテコステの霊的教会は、やがて制度的教会になっていった
2. その自己理解によると、霊と秩序は退け合うのではなく、互いに包含しあうのである
3. 旧約においてはカハール、新約においてはエクレシア。その概念は「神の」という所有格と結びついて用いられる
4. 新約聖書における教会は、神の教会である、したがって垂直的なもので、水平的なものではない

8 □ 3. 職務の階層制の形成

H.G.パールマン著『現代教義学総説』

1. すでに新約聖書の時代に、霊的教会が同時に制度的教会であるとはいえ、そこにはまだ職務の階層制は存在していない。新約聖書では、長老と監督の概念は同義語である。
2. 新約聖書においては、ペテロおよび使徒の職務は一回限りのものであるゆえ、移譲することは不可能である。使徒はイエス・キリストをじかに見、聞いた証人として、歴史的、一回的繰り返し不可能な教会の「基礎」である。
3. 二世紀において、使徒的・専制的監督制が形成され、中世において、教皇制はその力の頂点に達した。

9 □ 4. カトリック教会観の“脱構築”としてのプロテスタント教会観

宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』

- プロテスタントの考え方は、ローマ・カトリックの教会観を背景にして見た時、最もよく理解される
 1. 教皇を中心とする教職位階制としての教会 ↔ 聖徒の交わりとしての教会・万人祭司
 2. キリストの代理としての不可謬な教皇 ↔ 聖霊こそイエスがいなくなったときのイエスの現臨
 3. 教会の使徒性：聖ペテロの相続者としての教皇 ↔ 使徒的福音・使命・交わりと礼典

10 □ 5. 福音主義教会観の破滅としての“自由主義教会観”

齋藤正彦著『イエス・キリストと教会』

1. 「キリストこそ教会のただ一つの土台である」という根本的視点が忘れ去られ
2. 神的なものを人間化し、時間化し、事物化し、世界化し、実用的な何ものかに化そうとする…包括的かつ精力的な試み
3. 教会は個々人の霊的生活発展のために、宗教意識をわかちあう、便宜的、人間的共同体の一部にすぎない
4. 第一義的に重要なことが、個人の霊的生活の発展なら、伝統的な教義や制度の枠は、不必要なであるばかりか、むしろその発展を妨げるものとして、廃棄を要求される
5. このような教会観においては、歴史的制度的教会は、その必然性を喪失し、伝統的教義や、礼典、法的制度的組織に対する無知、軽視、混乱が引き起こされ、心情主義が教会を支配するに至る

11 □ 6. 神学的問いとしての教会観－宣教現場より

C.W.ウィリアムズ著『教会』

1. 「神学的問いとしての教会観」の出現は、アジア・アフリカの伝道の現場から
2. 旧世界から到来した分裂した諸教会からの、雑多な伝道団の不統一がその不条理性を暴露した
3. 宣教師たちはその不条理性を非常に早く感じ取った
4. ただひとり主がおられるのであるから、ただ一つの伝道団だけが存在すべき
5. 彼らは多くの教会が存在する理由とその多くの教会が再びひとつになれるかどうかを見出すために、聖書と教会の伝統を問い始めた

12 □ 7. エキュメニカル運動における教会論の変遷

C.W.ウィリアムズ著『教会』

- それから、不可避免的に、教会論はエキュメニカル運動によって神学的注目をあびるようになった。
- 彼らは諸伝承の背後にある真の伝承－諸教会の背後にある真の教会－を共同して追及し始めた。
 1. 第一期：共通の教会論を探求することにより、私たちの分裂の背後にある「連続性」を精密に研究した。
 2. 第二期：教会論的追及の内部志向的性格が自己挫折を起こしうるとの疑惑から、「宣教」は教会の基本的しるしとして付加されなければならないと強調された。
 3. 第三期：この転換はさらに根本的な形となり、古典的な「教会のしるし」に「宣教」を付加することによっては十分とはいえない。教会論を神学的関心の中心から移動させ、教会それ自体を目的とすることを意図せず、「この世に対する神のしもべ」となる

13 □ 8. エディンバラ会議からバンコク会議まで

宇田進論稿「世界伝道会議とWCC」

- 二十世紀の世界の教会の歩み－宣教に関して二つの現象
 1. 教会が宣教の仕事を自己の本質に属することとして本腰で引き受けるようになってきたこと
 - 「教会と宣教の統合化」（以前は数多くの伝道協会設立によってなされていた－教会と伝道の二分化）
 - 五十年代以降－教会はそれ独自の本質的基盤を持つもではなく、この世への福音宣教の行為において生起するにすぎない：極端な機能論的な教会論

2. 教会と宣教とが漸進的に深く神学との出会いを経験してきた：「宣教学・宣教の神学」と呼ばれる神学作業の進展

14 □ 9. エキュメニカル派と福音派

宇田進「世界伝道会議とWCC」

- 宣教上の諸問題の受けとめ方の相違
 1. 西欧世界の後退と第三世界の台頭：世界伝道命令の消滅・無意味化⇔今日も神的権威を帯びた命令
 2. 無数の宗教の平等の権利の多元化社会：キリストのみをなし崩しにするシンクレティズム・ユニバーサリズム⇔キリストの独自性・普遍性
 3. 人間の解放と自由のための闘争：伝道即人間性の回復⇔キリストの救いのみわざによる新生の一産物
 4. 現代の世俗化の問題：宗教的・信仰的媒体の世俗化（「他者のための生き方」－人間イエスの模倣・宗教的媒体の解消、一種の文化運動化・社会運動化）⇔聖書・教会・聖礼典・教職

15 □ 10. 聖書的伝道の四つの要素

宇田進「世界伝道会議とWCC」

1. 「神のミッション」：
 1. 神よりつかわされた御子の派遣にかたどった理解
 2. 受肉の事実のように、“この世への同一化”という特色
 3. 教会は“しもべ”としてこの世に派遣
 4. しもべ的機能－伝道と社会的行動の正しい総合点
 5. 大宣教命令と隣人愛の「愛の戒め」の正しい関係づけ
 6. 「他者のための教会」－教会の宣教的構造のレポート（教会とは本来“外に出て”存在すべきもの）
2. 伝道の定義：結果でも方法でもなく、“使信”そのもの＝イエス・キリスト（①歴史的事実、②目撃者の証言、③罪の赦しと聖霊の賜物－福音の約束、④悔い改めと信仰の二つの要求）の四つの要素である。
3. 救いの問題：人間の経済的・政治的・文化的な“状況”という水平面で捉える傾向⇔聖書の語る救い＝第一義的に、キリストの贖いにより罪より救われ自由にされ再生すること垂直面で捉える、現実生活における「全体性」・社会的政治的「解放」はそれから生じるところの結実

16 □ 11. 自己の根源について徹底的に

宇田進著『総説現代福音主義神学』

1. 教会は中世的な意味で世界を支配する立場にない、統合力をもった世界観と価値体系を提供しえないという意識
2. 現代の社会と文化の諸変動の内部でキリストが働いておられるところで“しもべ”として奉仕するしか宣教の可能性は残されていない
3. コンテクスチュアルな教会観と宣教観の提唱－歴史の見解の「裏返し」としての教会理解の“世俗化”現象が広がりつつある－教会の一般文化史への解消か？

4. 教会は自己の根源について徹底的に問い直し、委ねられた使命を明確に自覚し、脆弱となり、息の絶え絶えの姿からキリストの将来へと復帰するように挑戦されている